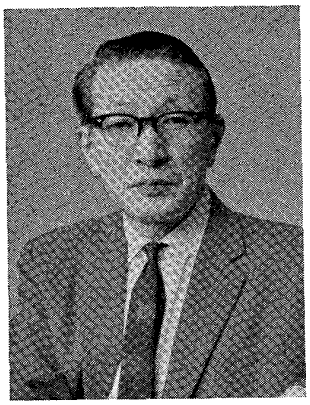
随　　想



日本人の独創性について思う

幸　田　成　康*

このごろ気になることは，日本人の独創性についてである．

最近のわが国の科学，あるいは技術の進歩は，世界的水準に達しており，諸外国の驚異の的になつているという．たしかに多少の自惚れはあつても，だいたいそう思つて大きい誤りはないであろう．しかし一歩退いて今日わが国で隆盛を見ている科学の分野，あるいは技術の方面で，わが国での発想（創意）が基になつて発展したものがどれだけあるかと問われると，残念ながら実例をあげるに困る．それに反して，外国で発想されたもので，わが国で取り上げられ偉大な進歩，改良，開発を見たものはすぐ念頭に浮ぶ．

どなたかが書かれたものに，日本人は諸外国の発想を取り入れて学問的に深く掘り下げたり，あるいは開発を進めて実用にする能力に優れており，それによつて今日の隆盛を見たのであるから，むしろ発想なんかしないで，今後も発想を導入する手でいつた方がよい，という意見があつた．アイロニイなら論外であるが，まともに受けるとしてはたしてこれでよいか．

資源の少ないわが国ではたよりになるのは，われわれの頭脳であろう．多数の人力も頭脳を伴うのでなければ力となり得ないのは，インドに例を見る．ところで，頭脳の最も人間らしい活動は，発想あるいは着想ができるという，いわゆる独創性あるいは創造性であろう．統計数理研究所が行なつた国民性についての面接調査では，「日本人の国民性は独創性に富む」と思つている人は 7％ しかなつたという．恐らくこれが通念であろうが，はたして日本人は独想性に欠けた，模倣し改良する能力にのみ優れた国民性であろうか．

私はそうは思わないし，思いたくもない．また，いつまでも独創性皆無であつてはならないと思う．しかし，個人に独創性を尊ぶ気風が乏しく，社会に独創性を育む雰囲気が少ないことは，事実であろう．

まず社会的な面から見ると，開国後百年の歴史は，科学と技術の後進性を取り戻すための追跡の道であつた．まず導入と模倣が必要であり，新しい発想を取り上げる暇がなかつた．今日もなおこの歴史は慣性となつてわれわれの上に続いている．しかも，導入と模倣と，それに次ぐ改良と進歩に成功しただけに，それが今日では国民性と自覚されるほどになつてしまつた．

一方こうした自転車操業的な国状において，企業体の方も着実な成果を期待する余り，でき上つたもの，あるいはある程度でき上つた，レディ・メイドのものを取り上げて進めるという安全第一主義の方針がとられた．経営上当然のことではあるが，現状はそこですむとしても，将来もこれのみでよいとはいえないであろう．

翻つてわが国の企業体がこの道を行く別の理由には，わが国には，発想によつて出発し大きい技術となつて大きい利益をもたらした実例がない．ということがあるのではあるまいか．それが冒険心をそそらない理由となつて，悪循環の輪から抜け出せないのであろう．

* 本会評議員　東北大学金属材料研究所教授　工博

ここで考えさせられるのは，わが国における科学と技術との間の溝の存在である．明治初年，ある程度完成した形で科学は科学，技術は技術と独立して輸入された．そのため，技術をバックに科学が発達し，科学の成果によつて新しい技術が生れるという科学と技術間の交流が身についていない．科学者は技術に対して冷たく，技術者は科学を信用しないような雰囲気がありはしないか．

もつともつと科学者が現在の技術の問題の中から，技術の基礎となる研究を取り上げるとよいと思うが，それは泥沼に入ることであるといわれている．たしかに，外国文献に散見する新しい現象をいち早く取り上げて精しくしらべることや，ある物で知られた新しい現象や手段を他の物に適用してみるということは，多少の新鮮さはあるし，ある程度の成果が予測できる．もちろん，この種の研究も必要である．しかし，それとは別に新たな発想から出発したものが欲しい．安全第一主義を越えた冒険心と大胆さが欲しい．事柄はちがうが，「学いやしくも本を知れば，六経は皆註脚なり」というくらいの気持で発想を進める気迫が欲しい．この道は，いばらの道かも知れないが，それにしても日本人一般に，まねをすることを恥かしいと思わない慣習がありはしないか．これは企業体でも同じで，家庭向き電気製品にその例を見る．この裏返しが，発想に敬意も価値もあまり感じない気持であろう．他人の発想を簡単に自分のものとする剽窃が新聞の話題になるのも，こうした心境によるのであろう．ここらで心機一転して，日本人の発想による新しいものが科学にも技術にもあらわれて欲しいと願う．そうならないと，ますますはげしくなる国際的な競争におくれをとる時がくるであろう．私は，それがこのごろ気にかかる．

さて最後に，私の高校時代の作文をご披露する．

「古人の偽筆を衣食のために書きはじめた男があつた．はじめは拙かつた．しかし年月を経るうちに段々上手になり，ある古人のときには，その本人の癖を含んで，しかも本人よりも上達の域に達するほどになつた．書画鑑定家は，古人のうまさを越えて先に行つてしまつたこの偽筆家のうまさに感歎の念を禁じ得なかつた．しかし，結局彼は偽筆家に過ぎない．」

そういう私も，長く偽筆家の道を上達もせず歩みすぎたようである．